

琉球大学学術リポジトリ

第一次世界大戦と戦争詩人 トマス・ハーディから
アイザック・ローゼンバーグまで (4) Wilfred
Owen (1893~1918)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2010-10-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉村, 清, Yoshimura, Kiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/18207

第一次世界大戦と戦争詩人
トマス・ハーディからアイザック・ローゼンバーグまで(Ⅳ)
Wilfred Owen (1893-1918)

吉 村 清

第一次世界大戦（以下と大戦と略す）が勃発した1914年8月には、当時21才だったウルフレッド・オーエンはフランスで英語の教職についていた。「祖国防衛とベルギー解放」を大義とするイギリスの8月4日の対独宣戦布告を機に、ナショナリズムとヒロイズムに陶酔し志願兵となるべく徴兵局になだれ込んだ母国の若者たちとは異なって、オウエンは大戦を距離をおいて眺めていた。開戦当初に母国にいる母へ宛てた書簡のなかで、オウエンは「アナトール・フランスとともにタイルハイド（ともに戦前は平和主義者であった）がライフルを背にしていると聞いています！ 帰国した際には私は入隊するかもしれません。ですからこの考えについて心しておいてください。もし入隊するのならそれは悲しいことです。入隊することは、自分が生き続けることがイギリスにとって無用であることを自認することですから…私の生は私の死よりもイギリス人にとって価値があります」などと述べて、義務感による入隊を示唆しつつも、大戦が彼にとって死を意味するという否定的立場を提示している。しかし翌15年6月の同じく母へ宛てた書簡のなかでは「教練の退屈さを知らないわけではなく、50年先に詮索好きな孫たちに囲まれて榮譽を失いたくない、ということでもありません。だが私は今、激しく戦いを欲しています」と述べ、心境の変化を語っている。「身近でおきた戦争による破壊と苦悩に対する戦りつ、軍務につくことへの自信、自らの詩的才能を戦場で発揮することへの興奮という多様な感情を抱きつつ」（クラールマン 2158）、同年の9月には彼は帰国し、10月21日には Artists' Riflesに入隊した。教練中、彼は有能な兵士となるべく努力を重ねつつ、ロンドンの文壇との親交を深めた。翌16年6月には the 5th

Battalion of the Manchester Regiment に少尉として配属された。その後彼はソムの会戦（16年7月～11月）に加わるためにフランス北部のエタブル基地に赴いたが、前線に向けて出発する直前の17年の元旦に母に宛てた書簡で「フランスに来ていることには、すばらしい、英雄的な気分があります。…興奮しています。興奮は私の幸福にとって欠くべからざるものです」と胸の内の高まるヒロイズムを率直に述べている。

しかしソムでの初めての戦場体験は彼の戦争観を変えた。同年1月4日付けの母への書簡で彼はソムで受けた衝撃的な印象を次のように述べている。「どの士官の顔にも私がかつて見たことのない、またイギリスでは一監獄以外のところでは決して見られないであろう、悩み果てた様子があらわれています。…彼らは無表情の固まりそのものです。」さらに同月16日付けの書簡では「この4日間のことであなた（彼の母）を欺くつもりはありません。私は第7地獄の苦悩を味わいました。私は前線にいるのではなく、その前にいるのです。…多くの者が泥に足をとられ、防水長靴や、装備や、ときには衣服まで脱いで泥から抜け出す始末です。高性能爆弾があたり一面に落とされ機関銃は数分おきに発射されています。…私の隊の4分の3の者は戦死しました」と過酷な戦況を苦痛のトーンで報告している。同年5月、彼は極度なシェルショックを思い帰国し、エディンバラのクレイグロックハート陸軍病院に入院した。誇り高い戦士は恐怖におののく兵士になりかわったのであるが、治療を受けながら彼は大战への幻滅と憎悪をますますつのらせていった。

次に思想と詩作の上でオウエンに多大な影響を与えたシーグフリード・サースンとの同病院での出会いについて述べたい。同年7月にサースン（1886～1967）は戦争を不要に継続しているとして政府・軍当局を批判した「兵士の宣言」を新聞に投稿したため軍部で問題となり、軍法会議でなく軍医会議にかけられたが、彼の投稿はシェルショックによる無謀行為であると決定され、その「治療」のため彼はオウエンのいる病院へ「入院」を強制された。オウエンは既に大战をリアルに描いたサースンの反戦詩集 *The Old Huntsman & Other Poems* (1917) を読んで深い感銘を受けていたので（「彼の塹壕のスケッチのようなものはこれまで書かれたことはなかったし、これからも書かれることはな

いだろう)、二人は直に懇意となり、「詩を、大戦を、平和主義を、暴力の前にキリスト教的非暴力を、良心の問題を語った」(シュミット 159)。病院でのサスーンとの交際は2カ月余であったが、オウエンはこの先輩詩人の影響を受け、自分の西部戦線での体験をもとに戦場の醜悪な状況を短詩にまとめていき、反戦詩人としての姿勢を構築していった。シェルショックが癒えた翌18年8月、本国勤務の可能性もあったにもかかわらず、オウエンは再び西部戦線へ向かう。彼には戦場で苦悩する部下たちを、将校として指揮し擁護する責任感があったからである。「召集」(18年6月作)には彼のこのような心境が表出している。「僕は男たちのため息を聞いた、彼らは自分たちの苦悩を／語るすべもなく、いや、その意志さへ持っていない！／ある声を僕は知っている。今、行かねばならない」(拙訳。以下訳者名のない場合は同様)。また彼が「最大の友」、「友人中の友人」と呼んだサスーンが負傷し戦場を退いたことも彼の決意を一層強めることになったようだ。オウエンは同年10月1日に十字武勲章を授与されたが、大戦終結1週間前の11月4日にサンプル運河を部隊とともに渡っていたときに敵弾に倒れた。25才であった。彼は生前詩人としてはほとんど無名であったが、サスーンによって20年に編集出版された『オウエン詩集』を通して代表的な反戦詩人としての地位を構築した。

本稿ではオウエンは将校としてフランス戦線で軍務につきながらも、正義感(彼は「不正の収集者」と呼ばれていた)にかられ戦争を罪悪として捉える反戦詩人となり、戦場を人間を非人間化する地上の地獄として描写していることを考察したい。詩人のこのような立場は、詩に表出された反戦思想、戦場における犠牲者・加害者としての若い兵士たちへの同情、また彼らの勇気、友情、自己犠牲的精神などの美德の賞賛、それに軍指導部、ジャーナリズム、聖職者、一般市民などの主張・支持する主戦論に対する激しい糾弾となって描出されている。しかし、大戦の犠牲者・加害者としての兵士たちへの極端ともいえる限りない共感、彼ら以外の者を一方的加害者とする公平を欠く独断的・排他的態度を結果として生み、それが彼の戦争詩人として限界を示していることを論述したい。

恐らく大戦を題材にした最初の詩と思われる「1914年」と題するソネットに

は、オウエンの大戦を破壊と再生の根源とみるアンビバレントな戦争観が呈示されている。

戦争が起こった。そして今世界の冬が
破壊的で広大な暗闇とともに迫りくる。
邪悪な暴風は、ベルリンに中心を持ち
ヨーロッパ全体に渦巻き
発展の帆を引き裂いている。芸術の旗は
ことごとく引き裂かれ、詩は嘆いている。
今思想と感情の飢餓が始まる。愛のワインは薄くなり
人類の秋の作物は腐り、投げ捨てられる。

ここには大戦に興奮し、賛美する姿勢はなく、大戦を平和と文明（「人類の秋の作物」）を破壊する「世界の冬」、「邪悪な暴風」とイメージ化することによって、詩人の厭戦感と危機意識が表出している。次に詩人は古代ギリシャ文明を春に、古代ローマ文明を夏に、戦前の西欧文明を秋に喩え、それぞれの価値を重視するのであるが、大戦勃発後の状況を

しかし今、僕たちには、荒々しい冬が迫り、そして
新たな春の種蒔きが、種子のための血が必要となっている。

と捉え、大戦を「冬」として再度否定的に位置づけながらも、大戦を「再生のためのプロセスのひとつ」（ウエランド 144）とも位置づけ、戦争終結後の世界の再建を「新たな春の種蒔き」として希望的に捉えており、その再建のために兵士たちの流す血は不可欠であると述べている。すなわち、P. B. シェリーの詩「西風」の西風のように大戦を「破壊者・保護者」と見なし、兵士たちの戦場で流す血の上に西欧の再建は成り立つ、という楽観的ともいえる啓示的主張が呈示されている。そしてオウエンのこの予言は的中し、14年のクリスマスまでには、決着がつくであろうという両陣営の安易な思惑はずれ、大戦には両陣営の兵力として計約3,000万人が動員され総力戦の形で4年以上継続され、約900万人の生命が失われた後ようやく終結し、人類は苦難の再建の道を歩むことになる。しかし、後述するように、このように大戦を部分的に肯定するナイヴな姿勢はその後姿を消すことになる。

「不思議な出会い」と題する詩では、詩人は兵士たちの殺りく者としての罪悪感を反映させながら、人類が大戦から何も学ぶこともなく、発展に背を向け再び残虐獐猛な戦争へ突入する危険性をさらされていることを予言する。そして詩人の不吉な予感世界的不況とファシズムの嵐によって39年に的中することになる。

もう世間の連中も、僕らのやった殺りくに満足していると思う
或は満足せずに、流血になお狂奔し続けるかもしれない
その獐猛なこと、まるで雌虎さながらで、各国民が進歩から
道を踏み外しかけているのに、線列からはなれようとしめない。

(平井正穂訳)

「次の戦争」と題するソネットは第二次世界大戦を予言する詩ではなく、人類が互いに対立し殺傷しあう性質の戦争ではなく、人類共通の敵である死に対する「もっとすばらしい戦争」が到来することを希望する詩である。

おお、死は決して僕たちの敵ではなかった！

僕たちは彼を笑い、彼と同盟を結んだ、馴染みの友として
兵士は誰も彼の力に抵抗するために受給しているのではない
僕たちは笑った、もっと立派な人々が

より優れた戦争が来ることを知って。そのとき誇り高い戦士は自慢する
軍旗のために人間と戦うのではなく、生のために死と戦うことを。

この詩は国益のために自らの命を犠牲にすることの重要性を訴えているのではない。彼らを死と敵対させる政府・軍中枢部への抵抗の一手段として両者を裏切って、兵士たちは死と同盟を結ぶのである。兵士たちは死を親友として受け入れるが、それは「軍旗のために人間と戦う」ことを彼らに強要する国家に奉仕するためではなく、彼らの血を吸収し「新たな春に」芽生えるべき「種子」である次の世代が戦うことになるであろう人類共通の最後の敵「死」との「より優れた戦争」への布石として自らの死を選択していることを意味する。このようにオウエンは死の持つ2つの側面—身近な親友・最後の敵—を描写することによって、大戦の罪悪性を告発し、より高次の「戦争」への貢献を次期世代の共通の課題として訴えているのである。

既述したように、オウエンは大戦を人類相互による残忍非道な殺りくと性格づけているが、詩人が生前に出版計画していた詩集の「序文」には断片的ながら、戦争にこだわり、＜戦争の憐れみ＞に執着することを自分の詩人として責務とする決意が表明されている。

この詩集は英雄たちに関するものではない。

戦争以外の行為、領土、あるいは栄光、名誉

権力、威厳、主権、支配力などについてのものでもない。

僕の主題は戦争で、戦争の憐れさだ。

ここには戦争は英雄を生み出すもの、戦争は栄光ある男たちの冒険、戦争は国家間の威厳や主権を巡る名誉ある闘争などという古典的な戦争観はまったく見られず、むしろ戦争を人類の悲劇として捉え、兵士たちを英雄としてではなく戦争の憐れな犠牲者として捉える詩人の基本的な姿勢が打ち出されている。このような姿勢は「不思議な出会い」という詩でも再強調され、戦死した兵士の口を通して、「戦争の憐れみ、戦争が蒸留した憐れみ」を生前語るとこの叶わなかった真実として位置づけている。

前述したように、17年8月のサスーンとの劇的な出会いを契機にオウエンは反戦詩人としての道を歩み、戦場における兵士たちの肉体的・精神的苦悩を克明に描写することによって彼のテーマ＜戦争の憐れみ＞を翌年11月に戦死するまで追求していくのであるが、他の戦争詩人たちの例にもれず、批評家たちのオウエンに対する評価はプロとコンに分かれている。軍国主義者サー・ヘンリー・ニューボルトはオウエンの＜憐れみ＞を男にふさわしくない「偽りの憐れみ」(65)と非難し、米文学者ジョン・H・ジョンソンは＜憐れみ＞だけではそのテーマも限定され、せいぜい叙情詩の類しか書けず、大戦の本質を見極めることは不可能であると批判している(158)。同様に、W.B.イェイツもオウエンを嫌悪し「彼の詩はことごとく血と汚物、しゃぶりつくしたキャンデー・スティック」(80)と酷評し、このため彼が36年に編集した *Oxford Book of Modern Verse* 1892-1935からオウエンを排除したと述べている。だが、まさにオウエンの最大の関心事は戦争が生み出す醜悪なるもので、その醜悪なるものにかんして芸術的価値を付与するかという問題が彼の詩人としての存

材の中核となっていたのである。イエイツにはこのような事柄が理解できなかった、あるいは理解しなくなかったようである。「美が真実」であれば、「醜も真実」であって不思議はない。バーナード・バーゴンジーは「彼の詩は若者の死が主題である。彼の部下に対する態度は若い将校の未熟で父親的な責任感をもとにしており、それは大戦を題材にした詩によくみられるモチーフであり、また彼の根底にある同姓愛的な感情の偽装である」(417)と述べ、将校詩人としてのオウエンの部下への思いやりの態度を陳腐で未熟なものとし、詩人の抱く同情が同姓愛の一形態であるとまで主張しているが、その立証を怠っている。一方、ウエランドは次のように詩人を弁護する。「イエイツのようにオウエンは「すべて血と恥辱」と不満を漏らすことは、オウエンが描いた世界の醜悪な要素の重要性を無視するばかりでなく、それらの要素をシンボリカルに融合し、活性化しえた彼の卓越した詩的才能を過小評価することになる」(137)。ジョン・ベイリーもイエイツは「審美的に嫌悪感を催すものに対しては人的な次元で共感するような寛大さを持ち合わせていない。「詩は憐れみにうちにある」という危険なフレーズは他の詩人にとっては一時的な流行語に過ぎないが、オウエンにとっては疑いようのない真実であるということが、彼には理解できなかったのだ」(154)とオウエン支持の見方を呈示している。オウエンのある友人は書簡のなかで「苦悩する人類への激しい共感、できることならその苦悩を癒してやりたいという強い気持ち、それが無駄だとわかっているときでも、それを共苦することを回避することは彼にはできない。これがウィルフレッドの性格の特徴です。まさにこれがウィルフレッドそのものなのです。彼の感受性、彼の共感とはそれほどまでに鋭くて深く激しいので、直接的・個人的な経験は彼にとってなきに等しいのです。彼は代理体験的に苦しんだり、喜んだりすることしかできないのです」(パーキンス 286)と詩人の性格を表しているが、戦友の苦難を自分の苦難として共体験することのできる性格の特徴が、兵士の心理を克明に、限りない共感を込めて彼に書かせるのである。ウエランドの指摘にあるように「真の憐れみはひとつの価値コードを示唆している。我々はある人に許されていないよりベターな状況を視覚化できるときにのみ憐れむことができるのである。ソフォクレスは死なないということで生者を憐れむが、オウ

エンは生きていないということで死者を憐れむのである」(144)。『オウエン詩集の』序文でサースンは「彼は人々を憐れんだのであり、本人を憐れんだのではない。彼の人生の最後の年には、彼は自分の主張に対して明確なヴィジョンを獲得していた」(53)とオウエンを擁護し、同じくディラン・トマスも「オウエンを再読して、私たちは理解する、彼があらゆる時代の、あらゆる地域の、あらゆる戦争の詩人であるということ。戦争には一つの種類しかない。人々が人々に対決するという以外には」(82)とオウエンを支持している。オウエンの「憐れみ」は感傷に墮する低次元ものでは決してなく、またシルキンが指摘しているように彼の詩は正義感より発する「怒り」を全面に打ち出した作品もあり(筆者は詩人の「怒り」対しては疑問を持っているが)、それが彼の反戦詩の特徴となっていることは確かなのである。

戦場で悪夢が現実化した結果としての兵士の負傷、不具化、発狂、戦死などの問題は「疲れ死んだ男」、「廃兵」、「精神病患者」、「無益」、「悲運の青年への頌歌」などの作品に描かれている。「疲れ死んだ男」(17年8月作)は疲弊し不機嫌に死んだ兵士についての詩である。「彼は崩れた、疲れはてたというより、不機嫌に／悪臭の一塊、肉のぬるぬるした塊となって／誰一人として彼を蹴って歩かせることはできなかった。」その兵士はなぜ不機嫌だったのか？彼は休暇で帰省したときに「多分キャクストンホールの群衆を見たのであろう／だからあいつのガッツは無くなったのであろう」と詩人は考える。当時キャクストンホールは反戦平和主義者たちの集会によく利用されたが、彼の信じていた価値を否定する彼らの反戦の思想に衝撃を受け、前線に戻っても自己喪失に陥ったのであろう。また、彼は「妻が心地よさそうにしゃべるのを見る…改装されて立派になったホテルを見る。」彼は銃後の妻の快適な生活を豪華なホテルと直結し、妻の裏切りを直感し絶望している。彼はこうして市民と妻から二重の裏切りを受け、戦意喪失し、人生に絶望し、息絶える。彼の悲惨な死に軍医が「肥えた笑い」とともに残酷で侮辱的な言葉を吐き捨てる。「あの汚い奴/昨晚よこした奴はたった今死んだよ。うれしいね！」大戦はこの軍医から人間的な優しさ奪い、死者の尊厳を傷つけさせる。

兵士の悔根、絶望、屈辱は「廃兵」(17年10月)でも主題化されている。「サッ

カーの後だった、彼はハイボールを飲み/入隊しようと思った。」彼にとって戦争はサッカー以上に男性的で激烈なスポーツで、入隊と戦闘は男の特権であった。「キルトをはいた彼を誰かが神のようだといった。…また、メグを喜ばせるためだった/そうなんだ、あの軽薄な男たらしたちを喜ばせるためだったのだ。彼が入隊を希望したのは。」今彼は軽薄な動機で入隊したことを誰よりも自覚している。戦争の甘美な幻想に陶醉して出征した彼は「廃兵」となって、「車椅子に座っていた。…脚無しで、肘から下も切り取られて。」車椅子という専用監獄に拘束され、彼は性的不満に襲われるが、その解消の糸口は見いだせない。ヒーローでも男でもなくなった彼に女たちは冷淡だ。「今となっては彼は決して感じることはないだろう/娘たちの腰がどんなにスリムかを、その敏捷な手の温もりを/彼女たちは皆なにか奇病に触れるかのように彼に触れる。」「今晚、女たちの視線が彼から五体健全で強靱な男たちへと移るのに気づいた。」ここには女たちに忌避されて、荒んだ自閉の世界でかろうじて自己の存在を保っている傷痕軍人の救いようのない孤独、絶望、後悔、虚無感、不能感が迫真性を持って描き出されている。

戦争は男たちの肉体の自由を奪うだけではなく、精神の自由を奪い、狂気の世界に閉じ込めもする。「精神病患者」(18年5月)では「死者に正気を奪い去られた人々」が扱われており、彼らは戦場の悪夢と罪悪感に常に支配されている。

彼らはいつも見たり聞いたりせねばならない

大砲の轟、切れ切れに飛んでゆく筋肉

比類なき虐殺、浪費される人間、密集し過ぎて

彼らを救出するのも困難なほどだ。

だから激痛に悩む彼らの眼球は、脳の中へ

ちじこまっている、彼らの眼には太陽の光は

血の汚点と見え、来る夜は黒い血となり、

暁は新たに口を開いて血を流す傷だからだ。(中桐雅夫訳)

詩人は正気の世界の住人たちへの狂気に支配された患者たちの復讐を受け入れる。「かくて彼らの両手はつかみあう…彼ら兄弟を/強打した我々の後を追ひ、

彼らに/戦争と狂気を与えた我々を引っかきながら。」

兵士の戦死を有意義な貢献ではなく、不本意で無駄な犠牲と捉え、それに抗議する姿勢は「無益」(18年6月)と題するソネットにうかがえる。この詩のセッティングは恐らく冬の雪降るフランスの前線で、1兵士のある朝の戦死が語られている。雪が降っているが、太陽もでていようである。太陽は生命創造の源としてシンボライズされているが、死せる兵士を蘇らせる力は太陽にはない。「今、何が彼を目覚めさせることができるかは/親切で太古の昔からある太陽のみが知るばかりだ。」次に詩人は太陽と被造物との関係を問題にし、人間の生と死に対する疑問を呈示する。

太陽が種子をどの様に目覚めさせるかを考えてみよ
かつて、太陽は冷たい星の土を目覚めさせた
肢体はこんなにも見事につくられていたのに、わき腹は
くまなく神経が通っており—まだ温もりがあるというのに——
もう硬直して動かないのか?
土からできた人間が成長したのはこんなことのためだったのか?
——おお、いったい何が愚かな日光にわざわざ苦勞させ
地球の眠りを破らせたのか?

詩人は若者が立派に成長しても空しく戦死する運命にあるのなら、生命の創造自体の意味に懐疑的にならざるをえない。戦争を創造し、自らを破滅させる人類の愚かさを告発する声はここにはなく、太陽(神ともとれる)による自己破壊的な人類の創造そのものを疑問視しているが、もちろん生命の尊重と人生の肯定という重要な主題を内包している詩である。

兵士の死を無駄な犠牲と捉え、その死に対する教会の常套的な葬儀を見せかけの哀悼であるとサティライズする視点は「悲運の青年への頌歌」にうかがえる。

牛馬のように死ぬ者に、何の弔いの鐘だ?
ただ銃の恐ろしい怒りだけが
吃るライフルのせわしい銃声だけが
慌ただしい祈りを早口に吐き出すのみ。

どんな見せかけの哀悼もいらぬ。どんな祈りも鐘も不要。

詩人は兵士が国家の戦争努力のために「牛馬」のように非人間的な死を強制されていることに対して憤怒の感情を表明し、そのような死者に対する因習的で偽善的な美辞麗句に満ちた葬儀の愚劣さを糾弾しているが、後述する「無感觉」と題する詩においても、兵士たちが「欠ければ詰めればよだけの充填材」として扱われていることに怒りを表明している。詩人にとって、戦死は国家や大義のために意義ある貢献や犠牲では決してないのである。詩人は戦場で戦死した兵士への弔辞を武器に述べさせ、母国では為政者や聖職者ではなく、純真無垢な少年少女たちの優しい心根に聖なる別れの言葉を期待する。死者たちの冥福を祈るための蠟燭は不要で、その代わりに

少年の手にはなく、彼らの眼にこそ
別れの聖なる灯火を輝かせよう
青ざめた少女の額は彼らの棺衣
彼らの花は黙せる心の優しさ
ゆっくりと訪れる黄昏は下ろされるブラインド。

戦争は完全なる罪悪であるという絶対平和主義の立場から戦争詩人を論究するジョン・シルキンは「オウエンの言葉には戦争を栄光化する弱点がある。「悲運の青年への頌歌」には戦死を神聖な犠牲として美化する傾向がある」(19)とオウエンのエレジスト的な詩作態度を批判しているが、＜戦争の憐れみ＞よりもサスーン的な＜戦争糾弾＞の憤怒の姿勢を肯定するシルキンとしては当然であろう。無論、死者に対する過剰な感傷は死者に対する侮辱となりうるが、戦争の犠牲者として彼らに打算抜き哀悼の意を表すことは人間として当然なことではないのか。

「不思議な出会い」は一方は殺し、他方は殺された二人の兵士たちの地獄での出会いを通して兵士の担う加害者・被害者という二重の現実的役割、芸術家・精神の救済者・平和主義者への願望とその可能性を剥奪する戦争との相克をテーマとしている。第1スタンザで登場するスピーカーの「私」は「戦場を逃れて、どこか暗いトンネルに入り込んで／しまつたらしかった。」

そこにも所狭しとばかりに眠っている連中がうなっており

調べていくと、その中の一人が飛び起きて、僕を見つめた
彼の死の微笑から、僕たちが今地獄にいることを知ったのだ
私が「誰だか知らないが、君、ここでは悔やむことは何もないよ」
と語りかけると、「そうだ」
(平井正穂訳)

と彼は言い、生前に果たせなかった芸術への激しい願望を吐露する。
但し、空しく過ごした

あのやるせなかった歳月は別だ。君の希望がなんであるにせよ
僕も昔は希望を持っていた。誰も経験したことのない
強烈な美を死にもの狂いで追い求めていたのだ。その美は
静かな眼差しや、束ねた金髪とは無縁で、時間の静かな
流れを嘲笑するほど烈しいものだった。

彼は戦争で空しくついやした歳月を美の追求（芸術）に振り向けることができ
なかったことを悔やんでおり、また「叫び残したことがある、今となっては無
駄だかも知れないが」と続け、「つまり真実を、戦争の憐れみを、戦争から滲
みでる憐れみを叫びそびれた」と無念さを語る。彼は明らかにオウエンの分身
であるが、次に彼は人間性の内奥に潜む好戦的で残忍な傾向を攻撃する。「彼
らの獐猛なこと、まるで雌虎さながらで、諸国民は進歩から道を踏み外してい
るのに、彼らは戦列から離れようとしない。」彼はもし生存いたら、勇気と知
恵とで破壊と滅亡に突き進むこの世の状況を停止させたかったと願う。そして
彼は戦争を通してではなく、人々の精神的苦痛の癒す形で世界に貢献したかっ
たことを述べる。

そのうちに、連中も残虐の限りを尽くし、血に染まるだろうが、
そうなれば、僕はここから地上に出てゆき、清らかな泉の水で
彼らを洗ってやり、魂の深いところに秘められ、戦火も
汚すことのできない真実で浄めてやるつもりだ。僕は、——
惜しみなく自分の心を注ぎこんでやりたい。それも傷口や、
戦争の汚物の溜り場に対してではない。傷を受けていないのに
額から血を流している人々に対してなのだ。
友よ、僕は君が殺した敵兵なのだ。

この暗闇でも、すぐ君だとわかったんだ。ほうら、そんな風に
昨日僕を銃剣で刺すときにも、君は洗面を作っていたね。

僕は避けようとしたんだが、冷えた手がそれを嫌がったんだ。

僕たちも、そろそろ眠ろうじゃないか……

彼は最後に自分のアイデンティティを明らかにするが、彼は戦うには寒すぎ、そしてなによりもその気がなかったことが明らかにし、自分を刺した相手を決して責めることをしない。二人は憎しみよりも愛を選択し、彼らの友人関係は殺される前、殺す前にすでに成立していたのである。二人はそれを地獄で確認しあい、彼は優しく「私」を誘う、永遠の眠りに。「戦争は国家間の問題の解決に寄与しないばかりか、人々の間に罪悪と破滅をもたらすものである。さらに悪いことは、戦争は将来性のある若者の命を短くすることによって、彼らの人類に貢献したいという激しい願望を、理想主義を、ヴィジョンを奪ってしまうのである」(バナージー 82)。

既述したようにオウエンは決して大戦を正当化し、美化し、賛美する態度をとらず、忌まわしくも愚かしい戦争の犠牲者として兵士たちを描くことに徹底している。前線という陰鬱で悲劇的で泥沼的な状況にあって彼らの人間性喪失を詩人は問題化し、他方兵士たちのなかにある温かい同僚意識、死の恐怖を直視する勇気、過酷な状況で発揮される忍耐力などの人間的な価値を支持する態度は「僕の詩の弁護」、「不思議な出会い」などの作品に打ち出されている。

「僕の詩の弁護」(17年11月)について、パーキンスは「兵士たちの苦悩が彼らの精神的な価値を奪いあるいは創造している」(165)と評しているが、この作品では戦場にいる兵士たちの墮落の証としての異様な陽気さと血に象徴される友情の価値とが強調されている。

戦争は彼らの眼に血ではなく栄光をもたらした

子供の体を揺するときよりも、さらなる歓喜を彼らの笑いに与えた

そこで笑うということは陽気さを意味した—

そこでは死が馬鹿げたものになり、生はさらに馬鹿げていた。

骨がむき出しになるまで深く切りつけても、ある力のせいで

僕たちは殺害に対して不愉快にも、後悔の念に襲われることもなかった

から。

兵士たちは戦場での死と生の不条理性を不気味に笑い、「殺害に対しても不愉快にも」ならず「後悔の念に襲われることもない」、彼らは人間性を喪失して墮落している。「春攻勢」（18年9月）という詩にも描かれているように、兵士たちは「地獄（戦闘）に体を張って突入し/超人的な残酷性でもって/すべての悪魔や火炎以上に悪魔的」でもあるのだ。エドモンド・ブランデンはオウエンを「一般兵士のための数少ないスポークスマンの一人」（54）と評価しているが、その延長線上でパーキンスは「オウエンのロマン主義的傾向は一般兵士の激しくも感情的な理想化のなかに現れており、これが彼の大戦への態度にさらに複雑性を付与している」（164）と述べ、オウエンのロマン主義的傾向は弱点ではなく長所となっていると結論している。兵士が敵に対しては野獣以下の悪魔的残虐性を発揮する状況にあって、詩人が心の支柱とするのは彼らだけの特異で独自の友情関係である。戦闘中は悪魔を演じなければならない彼らは、味方への純粋な天使的献身のなかに自らの人間性が完全に失っていないことを確信したいのだ。

僕は友情を育んだ—

古い歌に出てくる恋人たちの間では語られたことのない
というのも、愛は見て欲する眼の柔らかな絹糸でもって
美しい唇が結び合わされるということではないし

愛の喜びのリボンはいつかは落ちるもの—

だが友情は堅固な杭に張られた戦争の硬い鉄線によって巻きつかれ
血の滴る包帯によって結ばれ

ライフルの革紐の網で編まれたもの

オウエンは兵士の精神の世界に悪魔と天使の同居を認識し、悪魔的側面には同情を友情という天使的側面には賞賛を送っているのである。

今まで見てきたように、オウエンは戦場で命を賭けて運命をともにする兵士たちには限りない共感を寄せているが、軍上層部、聖職者、ジャーナリスト、銃後の市民たちには彼らの戦争の現実に対する無知、非情さ、偽善性ゆえに批

判的である。彼の「詩が効果的でないのは、兵士は単なる犠牲者で、責められるべきは市民というあまりにはっきりしたモラルの区分があり、詩人自身はヒロイックなトーンでその真実を伝えるからだ」(40)とジョン・オニオンズが批判するように、オウエンのこのような単純で極端な善悪二分法は大戦の真の性格を的確に表現しているとは思えない。

「祖国のために死ぬことは名誉なことである」(17年10月)は、戦闘を終えた兵士たちが疲弊して休息地へむかうシーンで始まるが、「疲労に酔い、音もなく背後に落ちた／毒ガス弾の嘲り声さえ聞こえなかった」ので、兵士たちは混乱のなかでやっとの思いでガスマスクをかぶり難を逃れるが、運悪く毒ガスの犠牲になる者もでる。緑色のガスの充満する残酷な空間は彼の命を奪う緑の海へとメタファー化される。

霧のかかったガラスと濁った緑の光を通して

彼が緑の海中へ溺れてゆくのが見えた。

夢を見るたびに、彼は無力な僕に飛びかかる

水を垂らし、咽び、溺れながら。

そしてこの事件は悪夢となって夜毎に詩人に襲いかかってくるが、戦争は夢のなかでも回避できない過酷な現実となるのである。最後に詩人は戦争の現実に対して無知な国策盲従型の読者を意識して、名誉の戦死という概念がいかに大戦とそぐわないものであるかという警告を発する。

友よ、君は熱心に例の嘘を教えないだろうな

死にもの狂いになって、烈しく名誉を求める子供たちに向かって

「祖国のために死ぬのは名誉なことだ」と。

「無感覚」(18年3月)では、複数のレベルの人々が大战のよっていかに無感覚化・非人間化されているのかを問題にしている。第1スタンザは恐らく下士官たちの苦悩や死に対して鈍感で思いやりのない將軍や将校たちを描いていると考えられる。

殺される前に冷血漢になれるものは

幸福である。

どんな憐れみも彼れを嘲ることもないし

丸石を敷くように同胞を敷いた道を歩くとき

その足が傷みを感じることもないから

このような心痛めることを知らない軍上層部にとって、戦死した若者は「補填すべき間隙」に過ぎず、「がんばればもっと戦えたかもしれない損失」に過ぎないので「誰も気にもとめない。」 オウエンの最後の作といわれている「スマイル、スマイル、スマイル」(18年9月作)という詩では、無神経な軍部同様に、戦争継続の必要性を国民に納得させるために手垢のついてレトリックを用いる政治家たちが批判されている。メル紙をのろのろと読む「眼のくぼんだ」「体の半分を失った負傷兵たち」は新聞が「死傷者は控え目に、戦利品は派手に」報道することを、国家にとって兵士は勝戦という戦争目的のための手段に過ぎないということを熟知している。為政者たちは「平和は不滅の死者たちを不当に遇することになろう／我々が捧げた息子たちは死を悔やむであろう／もしも我々が彼らを失うかわりに永続するものを得なければ」、「我々支配者は伝統ある座についているが／我々自身の面目を失うことになろう。もしも／最大の榮譽がわが国を保全し／戦った者達に帰することを忘れたならば」などと熱弁をふるうが、こういう陳腐で偽慢なクリシェーに対して体の半分を失った負傷兵たちは苛立ちを覚えることはなく「秘密が安全であることを知っている秘密情報部員のように／奇妙なスマイルを交わすのである。」しかし、大戦は上官たちや政治家を「無感覚」に陥らせたり、偽善のレトリックを弄することに熱狂させるだけではない。兵士たちは第2スタンザで登場するが、彼らも「無感覚」となっており、彼らは「自分自身を感じ、自分自身を思いやることをさえ止めている。／砲撃のもたらす苦悩や疑念を解消するのは／無感覚こそが最上であるから。」さらに第3スタンザでは、詩人は兵士が想像力を放棄していることを問題にする。「想像力を失うものは幸せだ／そうすれば持ち歩くのは弾薬だけで十分だから。」「彼らの感覚は戦闘の焼きごてで／長い間火のしをかかけられているので/死にゆく者の間で平気で笑うことができるのだ。」第4スタンザでは、帰省中の兵士を取り上げ、前線で戦闘に従事している他の兵士たちへの無関心に焦点が置かれているが、戦争は彼らから人間的情感を奪ってしまうのである。次に詩人は本国にいるナイーヴな少年を登場させる。「少年の

精神はこれまで鍛錬されていないので」、彼は死に向かって行進している兵士たちと並んで軍歌を歌いながら歩いている。第5スタンザでは、経験を積んだ兵士と若い新兵が比較され、いろいろな「思いで魂をすっかり血みどろにする」よりはむしろその新兵の「どんよりした、まつげのない眼」に倣って漫然と軍務についたほうがよい、と古参兵は考える。新兵は「誇り高くもなく、悲しげでもなく、好奇心もなく」、さらに「彼には自分の鈍感さと老人の落ち着きとの区別がつかないのである。」兵士にとっては愚直なまでの無関心こそ大戦の悲惨な現実によって自らの精神を破綻させない最上の手段といえるのである。最終スタンザでは詩人は兵士の「無感覚」と苦悩に対して無知で鈍感な銃後の市民たちを攻撃する。

だがキャノン砲でさえ気絶させることのない鈍い連中に呪いあれ
彼らは石と同様だ。

彼らは惨めで、卑しくて

その卑小さは純真さとは大違いだ。

かれらは自分の意志で憐れみに対しても

人間のあらゆる苦悶に対しても無感覚になっているのだ。

オウエンは、人間的な感覚を喪失する兵士たちにはそれなりの理由が認められるという姿勢を示しているが、戦争の悲惨を無視する市民に対しては怒りの抗議をおこなっている。しかし、前線での兵士たちの悲惨は当時の市民たちの想像力を絶するものであったし、また政府・軍当局は戦争を継続し有利に展開する必要から、市民に塹壕戦の過酷な現実を知らせていなかったのである。「政治家は戦争熱を国民に植えつけることに熱中していたし、検閲が厳しくなり軍事報道は禁じられた。従軍記者は前線に近づくことを決して許されなかった」(テイラー 58)。市民たちは無知と無感覚を選択したのではなく、強制させられたのである。息子を、夫を、父を戦場で失った市民の悲劇に対する憐れみをオウエンは欠いているのではないか。大戦に引きづられるままに、さして戦果を生まない無数の作戦を敢行し、多数の若者を死を確認した将軍たち同様に(「この戦争は、将軍と政治家のいずれもの手におえなかった」(テイラー 309))、市民たちも西欧帝国主義の辿った宿命的といえる大戦の犠牲者といえ

るのではないか。前線の兵士たちには寛大で、彼ら以外の者には厳しく批判的なオウエンの態度は公平さを欠いているといえるのではないだろうか。

既述した「廃兵」という詩では、詩人は聖職者と兵士及び戦争との関わりを問題にしている。既にオウエンの既成キリスト教に対する不信感「悲運の青年への頌歌」にうかがうことができたが、「廃兵」でも、兵士は哀れな被害者で、聖職者は加害者という不公平な構図をもとに同様なテーマが扱われている。

「ドラムと歓声のなかを徴兵された」誇り高いサッカー少年が、負傷し、幻滅して帰還し（「一部の者は彼の帰還を歓声で迎えたが、観衆がゴールにおくる歓声ほどではなかった」）、自閉的で陰鬱な車椅子での生活を余儀なくされている。ある日「彼にフルーツを持ってきた厳肅な男だけが/感謝し、それから彼の魂について尋ねた。」彼の魂のことを話題にすることから、厳肅な見舞い人が聖職者であることは明白だ。聖職者は若者を歓声で迎えることはしないが、国のために肉体を犠牲にした彼に感謝をする。その感謝はもちろん政府の戦争継続を是認し、支持する精神から生じてくる。彼は若者の肉体的苦悩には無頓着で、ただ魂のことにのみ執着している。彼には肉体的犠牲の真の意味が把握できないのだ。彼の厳肅な問いかけに健康な肉体に執着する若者は無反応で、彼の善意は若者には通じない。オウエンは17年に書いた書簡のなかで「キリストの基本的戒律は如何なる犠牲を払っても受身に回れ、不名誉や不面目を耐えよ、しかし決して武力に訴えるなでした。虐待され、非道な目にあい、殺されても、殺すな。これは非現実的で恥すべき原則かもしれませんが、でも現に存在するのです。説教壇の専門家たちはこれを非常に巧妙にまた首尾よく無視していると思います。……僕は麻ひした良心を持った良心的兵役忌避者ではないでしょうか？」と述べ、キリストの「汝殺すな」という戒律の重要性を認識しつつ、その教えから逸脱した聖職者たちに皮肉を浴びせている。さらに兵士となって加害者・被害者というパラドキシカルな二重の役割のジレンマに苦悩する彼自身の心境がうかがわれる。しかし、オウエンはこのパラドックスを「解消することはできなかった。そのための努力はしたが」（シルキン 233）。彼の苦悩は「自国の繁栄のためには植民地からの搾取は不可避」とする植民地経済に依存したイギリスの帝国主義的国策と「殺されても、殺すな」というキリスト

教の「非暴力主義」との相矛盾する双方の性格の融合に起源することであり、それは国自体の苦悩でもあったはずだ。「キリストの十字架像」と題する詩では、兵士たちをキリストのために苦悩し、国家のためにではなく友人のために自己を犠牲にする使徒たちにたとえ肯定しつつ、国家権力至上主義に墮落した教会を激しく非難している。

律法学者たちはすべての国民に国家への忠誠を
押し付け、煽っている。

しかしより偉大な愛を愛する者たちは
自らの命を捧げ、憎むことはない。

しかし、このように聖職者たちを画一的に、一方的に悪玉あつかいし、戦争責任を押し付ける詩人の態度には明らかに問題がある。詩人は自らの詩に客観性と普遍性をもたせたいのなら、国策に抵抗する術をしらず、やむをえず信徒を戦争に追いやる聖職者たちの疑念や苦悩にも焦点を当てるべきである。開戦直前まで参戦に反対していたが、戦争になると、戦争支持者として、はじめからそうであったかのような熱心さで、国民を戦争へ扇動していった国会議員ロイド・ジョージや、対独戦宣告の2日前に全国規模の反戦デモを繰り広げたばかりなのに、参戦直後に態度を完全に翻して、戦争協力の姿勢を明確にした労働党の節操のなさに比較すると、この司教は自己の信念と思想に対して愚直なまでに誠実である、といえようか。2詩ともに戦争で最大の被害者となるのは若者であるという立場から、若者たちに国家への忠誠を説き彼らを戦場にする聖職者を批判しているが、程度の差はあれ、本質的な聖職者たちも兵士たち同様に大戦の加害者であり被害者であるという広い視野を欠いているといえるのではないだろうか。大戦がナショナリスティックな総力戦という形態をとったのであるからには、その醜悪な側面の責任を一部の者にのみ一方的に負わせるのは公正を欠いた論理といわざるをえない。一部の者にその責任をになわせ、戦争を倫理的に解釈したいという願望は分からないでもないが、その願望を客観化することに詩人は成功しているとは思えない。「第一次世界大戦は、本質的にいえば、ドイツ問題の処理を中心としていた。連合国はドイツを抑制するために闘い、ドイツはそれ経済力に釣り合った政治的優位をかちとるため、闘っ

た。戦争はドイツ「問題」を解決するためにはなすところがなかった。それと裏腹に、戦争の結果は、この問題を従前以上に困難にした」(305)とテイラーは述べているが、ハーディの場合とは異なり、オウエンに大戦をこのように捉える視点を期待することはできない。18年11月11日に休戦協定が成立し、翌19年6月連合国とドイツの間でヴェルサイユ講和条約が結ばれた。これによってドイツはすべての植民地を失ったほか、アルザス・ロレーヌやポーランド・デンマークとの国境地帯を割譲し、軍備は制限され、ラインライトの武装は禁じられ、ライン川左岸は旧連合国によって保証占領された。またドイツは多額の賠償金を課せられた。このような旧連合国にとって圧倒的に有利な条約が「すべての戦争を終わらせる戦争」であるはずであった大戦のイメージを著しく損ねた。連合国のこのような対応には<戦争の憐れみ>はみじんも感じられない。またこの非情な条約はドイツ人に屈辱感と復讐心を与え、この条約、およびそれに基づくヴェルサイユ体制を打破したいという彼らの願いが、ゆがめられたナショナリズムが、思えばヒトラーの存在価値を高らしめ(山田 188)、条約成立後20年、第二次世界大戦を勃発させる火種となり、人々を「流血になお狂奔させる」ことになったことは周知の事実である。

終わりに、オウエンは開戦から1年2カ月の後、意を決して志願兵となり、はじめは勇敢に軍務を遂行したが、ソンムの会戦の悲惨な体験を契機に戦争への疑問を抱き始め、その後シェルショック治療のため入院した病院で反戦詩人サスーンに出会い、反戦の姿勢を固めていった。再び出征した西部戦線で、彼は兵士・平和主義者という矛盾する二重の役割に苦悩しその解消に努力しつつ、<戦争の憐れみ>をテーマに詩作に専念してゆくが、特に前線で苦悩する若い兵士たちへの限りないまでの共感を表出することに意を注いだ。彼の眼には兵士たちは国家の戦争行為への貢献する勇者としてではなく、意に反して殺害者としての役割を果たす憐れな犠牲者として写った。これは4年以上に長きに渡って膠着化した悲惨な大戦に参加した両陣営の兵士に共通する普遍的イメージとして受容できうることはある。しかし、一方、オウエンは兵士以外の者、すなわち、戦争遂行者としての為政者、軍指導部、協力者としての聖職者や一般市民に対しては激しく非難・攻撃する態度に徹底し、程度の差はある

には違いないが、彼らもまた基本的には戦争の犠牲者という側面を担っていたという点を認識できる精神的余裕は彼にはなかった。この事実が彼の戦争詩人としての未熟さと限界を示しており、それが大戦の本質を明確に見極めることの障害となり、その反戦詩に戦争詩としてのより豊かな普遍性と卓越した客観性を欠く結果を生んだ、と言えるであろう。オウエンの〈憐れみ〉には共感しうるものがあるが、彼の〈怒り〉にはやはり疑問が残るのである。

Works Cited

- Banerjee, A. *Modern English Poetry: A Selection*. Tokyo: Kaibunsya, 1982.
- Bayley, John. "But for Beaumont Hamel...." *Spectator* 4 Oct. 1963: 419. Rpt. in *Poetry of the First World War*. Ed. Dominic Hibberd. Houndmills: Macmillan Education Ltd., 1981. 153-57.
- Bergonzi, Bernard. "Late Victorian to Modernist (1880-1939)." *The Oxford Illustrated History of English Literature*. Ed. Pat Rogers. Oxford: Oxford UP, 1897. 379-430.
- Blunden, Edmund. "The Real War." *Athenaeum* 10 Dec. 1920: 807. Rpt. in *Poetry of the First World War*. Ed. Dominic Hibberd. Houndmills: Macmillan Education Ltd., 1981. 54-55.
- Craalman, Jr, Robert Edward. "Wilfred Owen." *Critical Survey of Poetry*. Ed. Frank N. Magill. 8 vols. Englewood Cliffs: Salem, 1982. 5 : 2156-63.
- Johnson, John H. "Pity Is Not Enough." Extract from *English Poetry of the First World War*. Princeton: Princeton UP, 1964. Rpt. in *Poetry of the First World War*. Ed. Dominic Hibberd. Houndmills: Macmillan Education Ltd., 1981. 157-61.
- Lucas, John. *Modern English Poetry: From Hardy to Hughes*. London : B. T. Batsford Ltd., 1986.
- Newbolt, Sir Henry. Extract from Letter of 2 Aug. 1924. *The Later Life and Letters of Sir Henry Newbolt*. Ed. Margaret Newbolt. London: Faber, 1941. 314-15.
- Onions, John. *English Fiction and Drama of the Great War, 1918-39*. Houndmills: Macmillan, 1990.
- Perkins, David. "The Literature of the First World War." *The New Pelican Guide to English Literature 7: From James to Eliot*. Rev. ed. Ed. Boris Ford. London: Penguin, 1983. 196-212.
- Sassoon, Siegfried. Extract from Introduction. *Poems by Wilfred Owen*. London:

- Faber, 1920. Rpt. in *Poetry of the First World War*. Ed. Dominic Hibberd. Houndmills: Macmillan Education Ltd., 1981. 53.
- Silkin, Jon. *Out of Battle*. London: ARK Paperbacks, 1972.
- Schmidt, Michael. *A Reader's Guide to Fifty Modern British Poets*. London: Heinemann, 1979.
- Welland, Dennis. "Chapter 4." *Wilfred Owen: A Critical Study*. London: Chatto & Windus, 1960. 62-83. Rpt. in *Poetry of the First World War*. Ed. Dominic Hibberd. Houndmills: Macmillan Education Ltd., 1981. 135-53.
- Yeats, W. B. Extract from Letter to Dorothy Wellesley. 21 Dec. 1936. *Letters on Poetry from W. B. Yeats to Dorothy Wellesley*. Oxford: Oxford UP, 1940. 113.

平井正穂編. 『イギリス名詩選』 東京: 岩波文庫, 1990.

中桐雅夫訳. 「オウエン詩集」 『世界名詩集大成 10: イギリス篇II』 呉
茂一ほか編 東京: 平凡社, 1959.

A. J. P. テイラー著/倉田 稔訳. 『目でみる戦史: 第一次世界大戦』 東京
: 新評論, 1980.

山田正太郎. 『第一次世界大戦』 東京: 社会思想社, 1985.

— Abstract —

The First World War and the English War Poets:
From Thomas Hardy to Issac Rosenberg (IV)
Wilfred Owen (1893–1918)

Kiyoshi Yoshimura

Unlike other young men who eagerly rushed to the Western Front with patriotic idealism and naive heroism after the outbreak of the War, Wilfred Owen was at first skeptical about the meaning of the war. He refused to see the war as basically just a struggle between the peace-loving powers--Britain and France--and the greedy and bellicose forces of Prussian militarism.

However, in October, 1915, fourteen months later after the out-break of the War, Owen joined the Artist's Rifles because he felt it his duty to enlist, and served bravely in France until he experienced the terrors and horrors of the Somme Offensive in 1917. Disillusioned and heavily shell-shocked, he was sent home to Craiglockhart War Hospital in June, 1917. There he fortuitously met Siegfried Sassoon, an already-distinguished poet, who greatly helped Owen see the war neither as glorious nor romantic but instead as obscene, inhuman, and wasteful. Under the influence and encouragement of the older poet, Owen, an "injustice collector," began to produce a series of anti-war poems derived from his trench experiences. As a soldier/pacifist, he pursued the theme of "the pity of war," writing more eloquently than other war poets of his generation the tragedy of young soldiers suffering and dying in battle.

On the other hand, he also wrote poems in an angry and indignant tone against the war-mongering generals, journalists, clerics and civilians at home. His humane view of young soldiers as both killers/victims is quite convincing,

but he fails to see the other participants of the war in a fair-minded way, only attacking and condemning them. This naturally hinders him from evaluating the war at a more distant, objective, and wider perspective. These limitations impede him from developing war poetry of universal worth.